

特22
110



秋



明治
38 8 14
内交





真錦歌抄

春

としの始に

立かへるけさの心はあつさゆみ

はるより先にのとけかりけり

新年雪

あら玉の年立けさのしらゆきは

梅につもるもこゝろありけり

新年興

たち返るとしの始のうれしさに

手まりはねつき遊ぶをとめ子

新年待鶯

とし立て軒はのうめは匂ひけり

とくもなかなん谷のうくひす

雪中若菜

日影さへ長閑かりけりむら消の

雪間なからにわかなつむ野は

夕霞

夕月のほのめくかけも打かすみ

おほろにうつるまとのうち哉

河霞

行みつのすみ田の川も埋もれて

かすみをたとる浪のうへかな

海邊霞

海はらに行かふ船も見えぬまで

たちへたてたるあさかすみ哉

鶯

長閑なるはるの光にうくひすの

聲のしらへもとゝのひにけり

竹鶯

きのふ今日園生の竹にふし馴て

ねくらなからにうくひすの啼

野外鶯

はる霞たな引のへにきてみれば

そこともしらすうくひすの啼

黄鳥爲友

としことにかならず來なく鶯は

のとけきはるの友にそ有ける

曉更鶯

さしくしの曉つき夜くらけれと

梅に木つたふうくひすのこゑ

嶺残雪

足ひきの山松か枝はかすめとも

なほ消のこるみねのしらゆき

餘寒

昨日までかすみしものを吉野山

またさえかへりあわ雪のふる

雨後梅開

夜を込て漑きし雨のぬるみにや

軒はのうめのはなさきにけり

梅香留袖

木の本を立はなれてもさく梅の

かをりゆかしきはなの追かせ

山家梅

みる人のなき山里にさくうめも

匂ひはかりはかくれさりけり

夜梅

春のよの月はおほろに霞めとも

さやかに匂ふうめのしたみち

水邊柳

池水を鏡となしてあさなあさな

まゆつくるらんきしのをあを柳

田家柳

青柳のいとはみとりに成にけり

よりにたにみよ小田の賤の女

春草漸青

昨日今日もゆる柳のめうつしに

またいろあさき野邊のわか草

河春月

水ぬるむ里の小河はほそけれと

かすみてうつるはるのよの月

春月朧

春のよも月の光りはかはらしを

つゝむかすみにおほる成らん

閑中春雨

鶯のこゑもきこえずなりにけり

ふる雨たりのおとはかりして

野春駒

壺すみれ咲出し野にこゝろなく

あれこそまされはるのわか駒

山中尋花

春かすみたな引おくにわけ入て

けふもたつぬる山さくららはな

雨中待花

春雨のふる日重ねてつれつれと

さくらんはなのまたれぬる哉

花下忘歸

しはしとてやすらふ花の下陰に

いつか夕日のかたふきにけり

春色浮水

春の色はうかひそめけり池水に

岸のやなきのまゆをうつして

夏

新竹

若竹のみとりの色はうすけれと

こもれるちよの深くみえつゝ

尋郭公

今日もまた尋ね尋ねてくれに身

一こゑもらせやまほとゝきす

初時鳥

去年聞しふる聲なから嬉しくも

待つけてなくほとゝきすかな

初聞郭公

待わひて空を眺むる折こそあれ

一こゑもらすほとゝきすかな

山家郭公

都には出しとすれやたえ間なく

わか山さとになくほとゝきす

堀切なる花菖蒲見にまかりて

紫のゆかりのいろもおのかしゝ

うすくこく咲く花あやめかな

夜橘

庭の面に花立はなのさきしより

夜床もかをるこゝちこそすれ

橘薫風

軒近きはなたち花のさきしより

ふき入るゝ風もなつかしき哉

梅雨晴

けさまでの名残もみえす梅雨の

はれ行まゝにゆふ日さしけり

曉水鶏

曉にそこはかとなきこゆるは

たかかたとたゝく水鶏なるらん

夕水鶏

夕月のさす楨の戸を明てみれば

くさむらかくれ水鶏なくなり

螢

道邊もしるくみえけり烏羽玉の

やみにほたるの集まれる夜は

竹庵螢

人もこぬしはの庵に小夜ふけて

みゆるひかりはほたる也けり

蚊遣火

夕顔の花もすゝけてみゆるまで

のきはいふせき賤かかやり火

水邊夏月

露むすふ池のはちすに月かけの

すゝしくやとる夏のよはかな

夏月涼

夏木立しけりし枝のすきまより

涼しくみゆるつきのかけかな

行路夏草

旅人のゆきゝの野邊の通ひ路も

わかすなるまでしけるなつ草

晩夏蟬

秋近きけしきの森になくせみの

はにあくつゆも涼しかるらん

川夕立

をつく波もみえず成迄かき曇り

隅田かはらはゆふたちそふる

夕立過

夕立の雲はあとなく晴れゆきて

すゝしくいつる月のかけかな

海邊夕立

こき返すひまたにあらす夕立の

雨にたゞよふあきのつりふね

月前納涼

我門の板井にやとるつきかけに

すゝしあまざる夏のよはかな

山家夏

淋しさは都のそらにことなれと

深山のおくはなつなかりけり

夏草花

夏草のしける野中のめうつしに

いとくうつくしなてし子の花

隅田川の煙火をみて

空高くあかりし花火みるか中に

きえてのこれるひとの聲かな

秋

新秋露

茂りあふ草葉に結ふしらつゆに

あはれをそへて秋は來にけり

夕萩

淋しさをなくさめかねし夕間暮

あとつれかほの萩のうはかせ

萩風似人

ゆふへゆふへ萩の上風聞ことに

とふ人ありとおもひけるかな

萩

夕月のほのめくかけもおく露に

やとりて匂ふあきはきのはな

薄

そよそよと吹くる風ともろ共に

うちなひきたるいとすゝき哉

夕薄

夕まくれ物淋しさに来てみれば

尾はなも人をうちまねきける

秋夕

夕まくれ軒ふく風の身にしみて

さひしさをふる虫のこゑかな

故郷秋夕

すみ捨てあれにし宿を秋とへは

ゆふへかなしき松むしのこゑ

對山待月

くるゝより今か出んとうち向ふ

山のあなたはつきになりけん

海上見月

沖遠くあみ引あまのすかたまで

さやかにみゆるよはの月かな

禁中月

久かたの月の光りのまはゆきは

たましく庭やてりそはるらん

樓上見月

大そらの月のひかりはたか殿の

下ゆくみつにうつしてそみる

秋月明

くまもなく晴たる空にさし昇る

ひかりさやけき秋のよのつき

月前琴

大そらの光りさやけき月の夜に

すかゝくことのおもしろき哉

曉初雁

なかさ夜のゆめもみはてし曉の
ねさめ折よきはつかりのこゑ

山霧

峯も尾も立かくせとも秋きりの
たえまたえまにみゆる山かけ

曉鹿

曉のゆめさめはてし折しもあれ
あはれをそふるさをしかの聲

鹿聲何方

まくらへに近く聞ゆと思ふまに
遠くなりけりさをしかのこゑ

擣衣

小夜中にね覺てきけは賤の女か
かた山さとにころもうつなり

擣衣何方

終夜きぬたのおとはきこゆれと
里はいつことわかすもある哉

閑居菊

文机の外にともなきさひしさを

なくさめかほの菊のいろいろ

菊花臨水

池水のそこにも花のみゆるかな

みきはの菊のさきそめしより

初紅葉

昨日まで緑とみしをいつのまに

山はもみちとかはりけるかな

山紅葉

初時雨降にし日よりむらむらと

山の木のはもいろつきにけり

暮秋雨

すきまもる風さへ寒く成にけり

秋もいまはのむらさめのあと

冬

落葉隨風

唐錦あるかとみえしもみち葉を

はかなくちらす木からしの風

朝霜

野へみれば草葉色なく冬かれて

ましろにおけるけさの霜かな

枯野

冬かれし野への尾花におく霜の

袖さむけにもみえわたるかな

厚氷

往來する小舟も今はなかりけり

さとの小かはのあつき氷りに

千鳥

浦風の音そさむけさまさりける

千とりのこゑを聞につけても

田家雪

ふる雪にあせの細みち埋もれて

田なかの庵は来るひともなし

雪晴

心地よく晴にけるかなしら雪の

ふりし昨日に今朝はかはりて

埋火

埋火の消かゝるまでまとゐして

ふけゆくよはも思はさりけり

爐邊會友

埋火のあたりはなれす語らへは

のとけきはるの心地こそすれ

爐邊閑談

埋火のあたりに友とかたる夜は

すきまの風もしらぬなりけり

袈

あつふすま重ねても猶寒き夜を

わふらん人をおもひこそやれ

歳暮

今日のみとなれる今年を急れぬ

あすこゝん年をたれもまちつゝ

山家待春

山ふかく家居しをれと花とりの

はるはいかにとまたれぬる哉

冬鶴

松の上になくひな鶴の聲さむし

つはさに霜やあさまさるらん

冬池

池の面の氷のひまをもとめつゝ

つかひはなれす遊ぶをしとり

雜

大路行く人をみて

きそひてもはしり行かな小車の

ゆきゝたえせぬ都おほ路を

橋

人跡もみえぬやま路のいた橋は

こけはかりこそむし渡りけれ

山家待人

山みつにこゝろをすます我菴も

むかしの友そさらにまたるゝ

故郷

うゑおきし軒はの松も枯はてゝ

むかしにはあらぬふる郷の庭

寄花述懐

移り行花のいろ香にくらへても

變るはやすき世にこそ有けれ

曉夢

庭とりの聲はかすかに聞なから
むすへる夢のさめかたさかな

暮林鳥

夕日かけ入かゝりたる森の中に
ねくらもとむる群からすかな

蘆間鶴

ちよゝはふ聲さへ繁く聞えけり
あしまに遊ぶ田鶴のむらとり

晴天鶴

晴わたる緑のそらにきこえけり
なく聲たかき千代のともつる

鳥

ほのほのとまた明やらぬ中空に
ふた聲三こゑなくからすかな

雀

夕まくれ竹の若葉にふしなれて
ねくらあらそふ群すゝめかな

犬

音もなくしつまり果し小夜中に

かと守あかすいぬのこゑかな

競馬

心のみさきにはしりてのる人の

かちをあらそふくらへうま哉

江の島にて

七十になるらんとみるおきな迄

あはひとりにとおり立にけり

筆寫人心

自から人のこゝろもみゆるかな

かきたる文字の筆のちからに

隣家琴

中垣をもれくる音もゆかしきは

となりへたてぬ琴にそ有ける

夜燈

さやかなる月もおもはて燈火の

花にむかひて夜をあかすかな

海上眺望

沖中のはなれ小島もかつみえて

なみしつかなる朝ほらけかな

うなる子

己かしゝ心こゝろにうなる子の

遊ぶさまこそつみなかりけれ

子

何事もしらぬ様なるをさな子も

いかはかりなる願ひあるらん

海邊松

綿津海のかさしとなりて幾年か

いそのまつか枝老せさるらん

窓竹

友とみるまとの呉竹としことに

しけるや家のさかえなるらん

寄書祝

大御代の恵みの露のかゝらすは

書のはやしもしけらさらまし

寄竹祝

限りなきさかえみせけり此宿の

軒端のたけのいろもかはらす

父君のみたま祭りに

君まつるけふの手向に露なから

なみたとともに手折る萩か枝

花を折て人の許にやるとて

霞たな引はるのけしき一しほにうちみや
られ侍るを如何に渡らせ給ふらんいてや
さいつ頃より待ちわたりし庭の花も昨日
今日は咲きも残らすなりにて侍れは長さ
日のつれつれも忘るゝやうにてなん一枝
御覽せさせまほしくてまゐらせ侍るを御
あたりちかうなかめさせ給はゝいとゝう
れしうなんよろつは對面たまはりてこそ

あなかしこ

秋の花ともを折りましへて
人のもとにやるとて

残る暑さもやうやうすらき侍りて涼し
き風の立ちそめ侍るをいかゞ渡らせ給ふ
らん八重葎しけれ庭の淋しさもものつ
から秋の色を装ひ顔なるものかしゝに咲
いてたるさまのさるかたにをかしう慰め
侍りてなん繕はぬまゝに咲き亂れし色は

御覽し所なく思ひ給へなから徒らにうつ
ろひ侍らんかいと口惜うてなん露な
から御覽せさせ侍るを一日二日も御あた
りちかう眺めさせ給はゝいと嬉しう
なん此あたり過させたまはゝ御車ひき寄
せさせ給へあなかしこ

月のさやけき夜人の許に

夕の空よりは一際秋の景色を装ひ侍りて
月の光りの面白さいかゞ眺めさせ給ふら

ん御あたりは燈火の光りも劣るはかりな
らんさやけさ夜更る程いとゝいかにとお
もひやりまゐらせられてなんつゆ光りな
き前栽も秋草の花の色なとさすかにをか
しう見え侍りて秋の色を装ひ顔にてなん
同し御心にもめさせ給は、葎の門をも驚
かさせ給へかしこ

紅葉を折りて人のもとに
やるとて

初雁の聲珍らしく朝霧深く立ちこめたる
向ひの山もおほつかなう眺めやる此頃の
景色いかに御覽せさせ給ふらんさるは青
葉に見え侍りし若木も今はやうやう色付
き一日一日の村時雨にをさをさ外の色の
たちならふへくもあらぬやうに侍りてな
ん君ならてと荒き風も心苦しう見侍る程
いまた一葉もうち散り侍らぬをいかて御
覽せさせまほしくてなんまうのほるへき
を障る事ともにて心の外にうち過し侍る

をちらぬまにとてあなかしこ

かへし

承りぬやうやう秋も暮れ近うなり侍りて
いはん方なう思ひ侍る折しも嬉しき消息
にて繰返し侍りぬ今日は庭の景色見侍ら
んとてうち廻り侍るをりしも紅の色も匂
ひもたゝならぬ一枝は御志の深さも限り
なう嬉しうも侍るかなこのあたりのはま
たしう侍るなれはいとゝ飽かすのみなん

もみち葉の色に劣らぬわかための

心ふかさを嬉しかりける

眞錦歌抄のおくかき

流れてはやき月ひなりけりとむかしの人のよみ
いてたりしはげにことわりにてことし明治の三
十八年は姉榮子後の名眞錦姫のみまかりたまひ
しよりはやくも廿年とそなりぬるされはそのみ
まつりつかふる中にとしころよみかきたまへり
し歌に文に数多きをさきつとしかきつめて眞錦
集となつけしに今その中よりいさゝかつみいて
ゝかくひと巻となしつゝみつくきのあとをもか

たをもうつしそへてみまへにそなふるひとくさ
とするはみこゝろにもかなふことならんと思ふ
ことなり姉世にいましゝほとはをさなきときよ
り歌よみ文かくことを好みたまひまなひの道に
いそしみたまふかたはらことのほの道にもわけ
いりたまひて鶴久子のしるへをうけつゝこれの
龜井の家にとつきたまひしのちもなほさきのこ
とかの久子につきて何くれと問ひばかりたまひ
しかば久子そのよしあしをねもころにときさと

せりしこと年月かさなれりその久子もさきつ年
みまかりしかは今はわかこゝろにまかせてかく
つみいてしことなれば難波のあしのおしかるふ
しもありもやすらんされとみたまゝつりのため
にとておもひおこししのみかは姉のしたしかり
し人ひとにも見せてともにそのよをしのほんど
することなればけふのまつりのひとくさとほう
けさせたまひなんかしさてかの眞錦集の中より
かくぬきいてしことなれば集の名をばやかて眞

錦歌抄と名つけつることになん

明治三十八年八月九日

養子しるす

明治三十八年八月七日印刷
明治三十八年八月九日發行

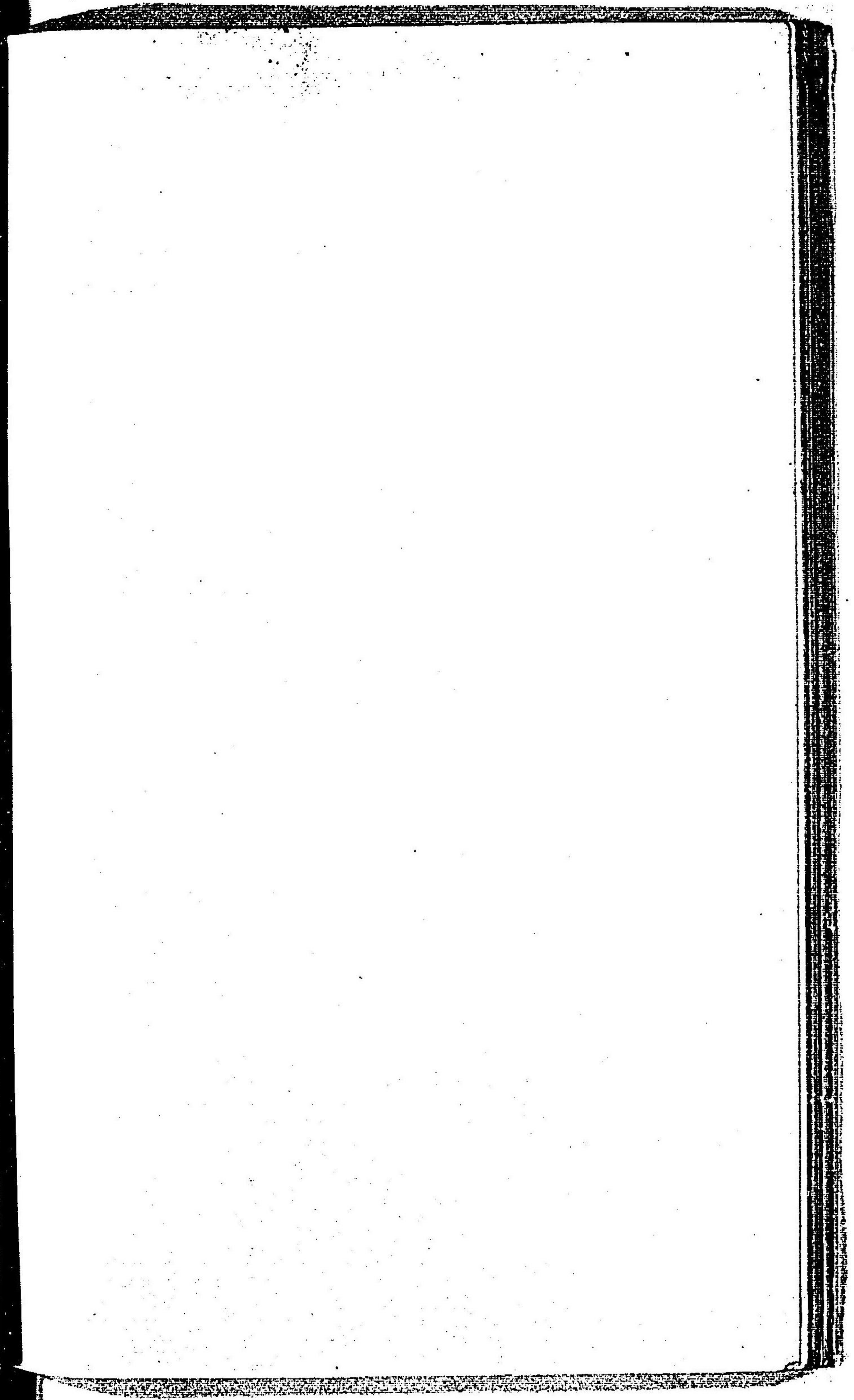
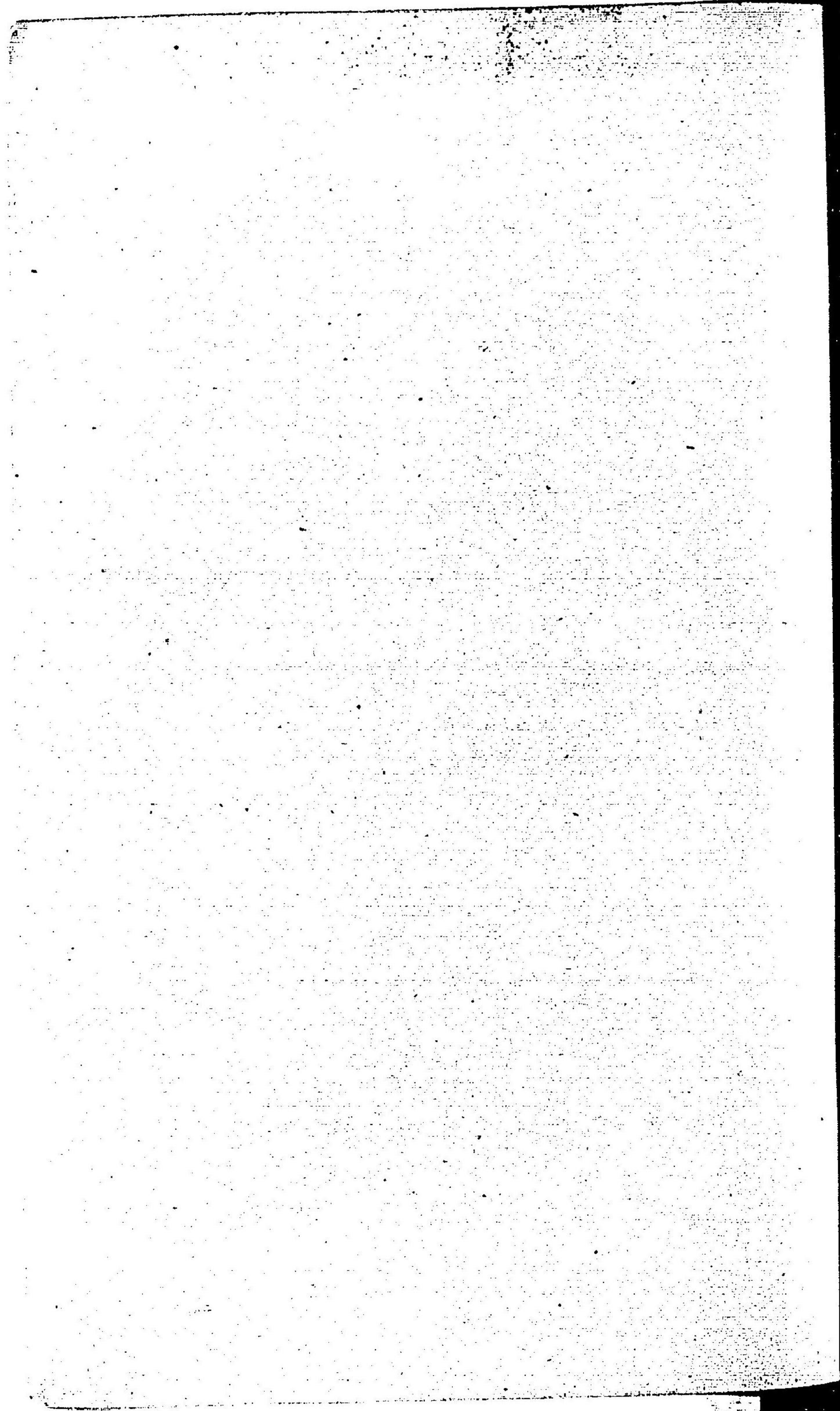
非 賣 品

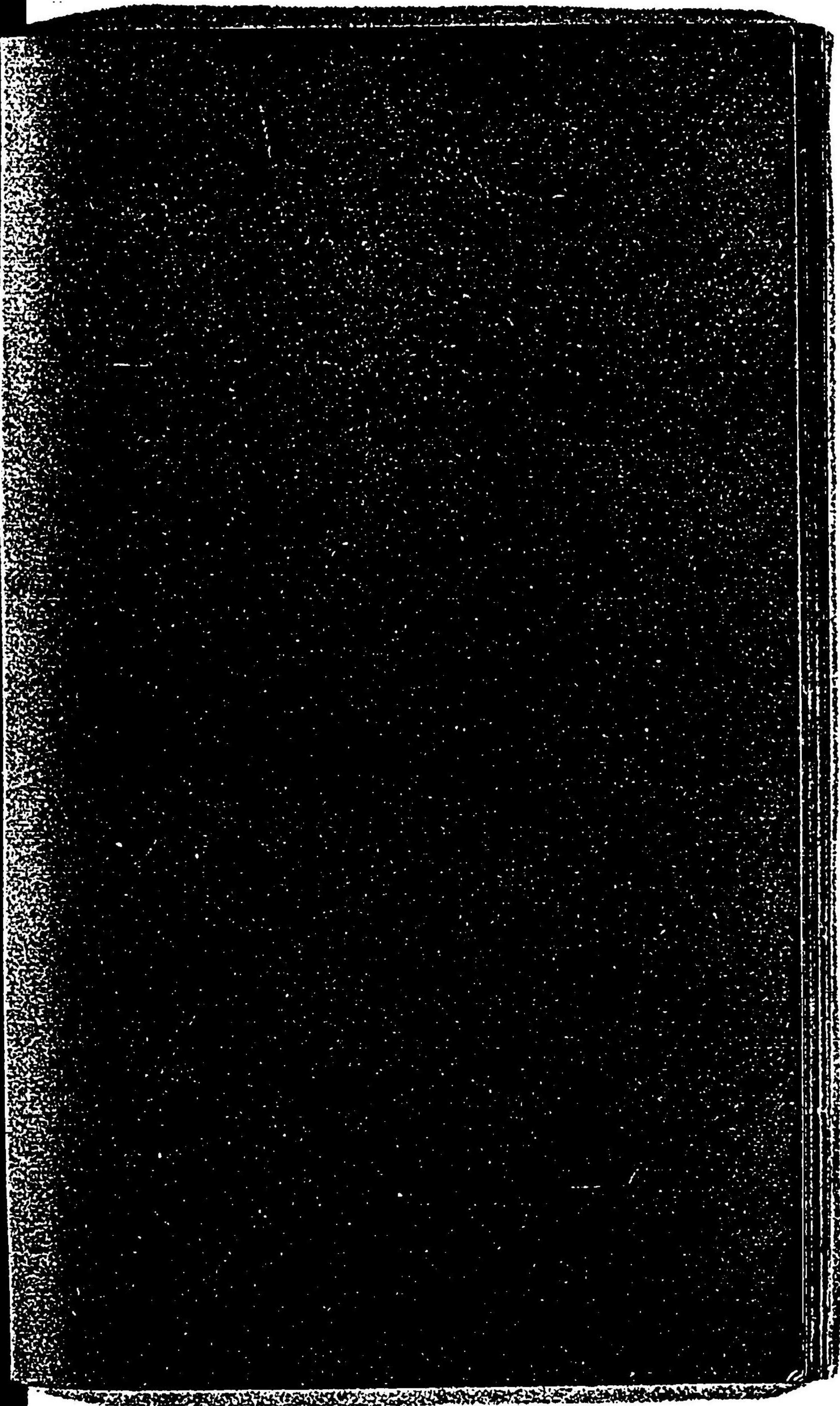
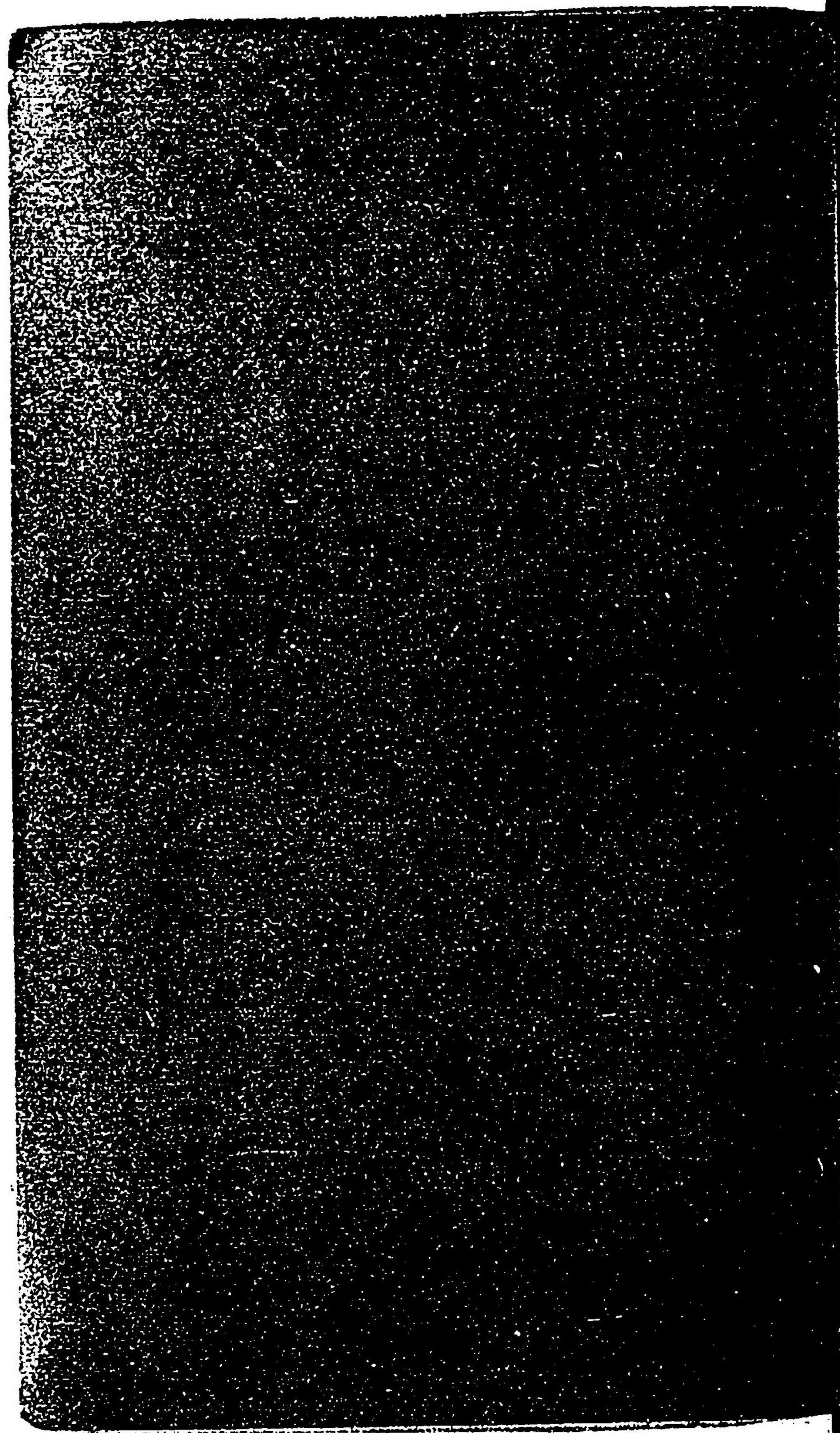
編輯者 龜井養子
東京市小石川區丸山町八番地

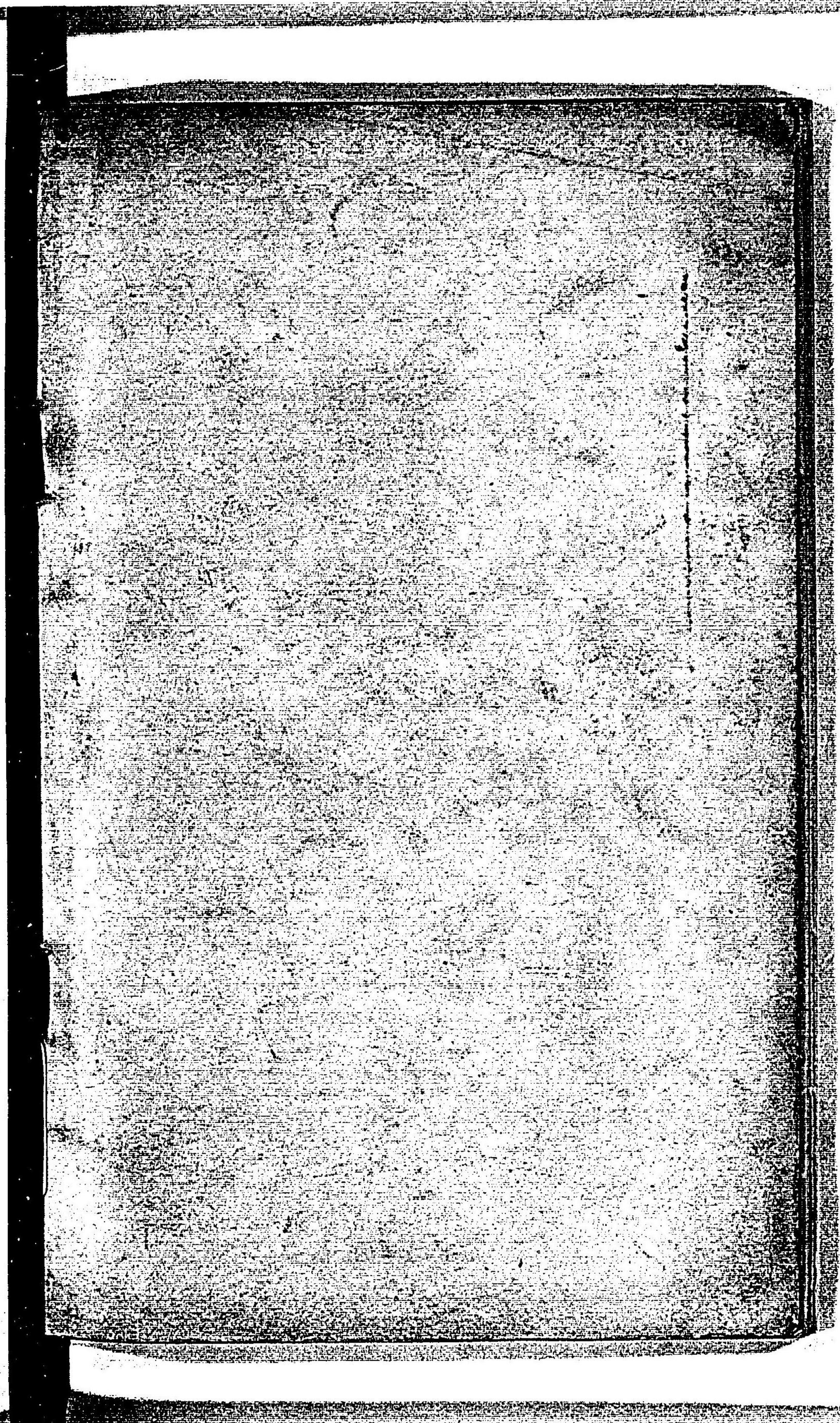
發行者 田中榮
東京市赤阪區一木町八十四番地

印刷所 株式會社 秀英舎 第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地









086584-000-3

特22-110

真錦歌抄

亀井 栄子/著

M38

DBD-1473



221
950

